



# 高校生の英作文に見るbecause 使用 : 頻度・文中位置の視点から

佐々木, 恭子

---

**(Citation)**

統計数理研究所共同研究レポート, 444:139-158

**(Issue Date)**

2021-03-15

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81012579>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012579>



# 高校生の英作文に見る because 使用

## —頻度・文中位置の視点から—

佐々木 恭子

神戸大学(大学院生)

### Abstract

This study explores the question of why Japanese high school EFL learners overuse causal conjunction 'because' and misuse it frequently without the main clause when expressing reasons for their opinions in their argumentative essays in English. The investigation focuses on the overall use of because clauses including misuse to observe how differently the conjunction behaves in essays by 4 groups of writers: 3 groups from each grader of Japanese high school EFL learners, and English native speakers (ENS) respectively. The data of high school students were obtained from JEFLL corpus, and the ones of ENS were from ICNALE Written essays. The frequency of 'because' use, the use at the beginning of the sentence, and each sentence pattern such as 'SV because SV.', were extracted and compared by the adjustment frequency. Chi-square tests were performed to confirm the significance of the difference. Correspondence analysis was conducted to sort out the characteristics of each group's use of sentence patterns. Qualitative analyses provide insights into the way how Japanese EFL learners acquire the use of 'because' and what causes the problem of overuse. The findings from close observation of the students' use compared with that of native speakers have an implication that the difference in the logical pattern in thought between the two languages influences Japanese learners' misuse of 'because.'

### キーワード

because, 過剰使用, 日本人高校生, 論理構造, 明示的インプット

### 1. はじめに

平成 30 年の高等学校指導要領の改訂により学習内容に「論理・表現」が設けられ、いよいよ現場でも本格的にライティング指導への取り組みが始まる。英語のエッセイライティング、特に意見表

明文では、一般に、自分の意見を書くだけでなく、その理由を明確に示すことが必要であるとされている。ここで重要なのが理由を表す接続詞 *because* の使用である。

*because* は中学校で初めて指導され、高校生には平易な既習語だが、高校生の *because* の使用には問題も見られる。(1)は、中高生英作文コーパス JEFLL Corpus に収録された高校 1 年生の「大地震が来たなら何を持って逃げますか」についての英作文例である(下線は筆者による)。

(1) ..., I want to take out my hamstar and its food. Because it likes my dauter and it is so cute. Next, I'll take out the photoes. Because it can't buy. If the photoes burn, I never see that. Then, I'll take out the radio and handy phone. Because it is useful for catching the information. I'll take out the my mothers jewelry, because it is expensive. If all of the money left, we can live. I have a lots of things that I want to take out, but the most impotant thing is me and my family is safe. Because if we died, we can't do anything any more. (S1 earthquake 06116)

短い作文の中に 5 回も *because* が使用されている(スペリングミスもそのまま転載)。さらに *because* は文頭で使用され、主節が存在しない。このような文は誤用であり、先行研究ではこれらを断片文と呼んでいる(小林, 2009)。高校生対象の英和辞典には次のような記載がある。

[ *Because* で文を始めない ] よく日本人は × I'm sorry I couldn't be there. *Because* I was busy. のように主節と *because* 節を別々に書くが、これは誤り。I'm sorry I couldn't be there, *because* I was busy. のようにするのが正しい。ただし, *why* 疑問文に答える場合は別。(『ジーニアス英和辞典第 5 版』, p. 187)

辞典には文頭位置での使用をしないこと、主節と *because* 節を切り離さないことを注意しているが、現状では高校生の使用にこれらは反映されていないようである。

本稿では高校現場で *because* 使用の問題について調査・分析する。そして、問題点の原因とその改善策を探り、教育現場への応用を検討する。ある語や表現の過剰使用現象は、母語話者だけでなく第二言語・外国語学習における言語学習の習熟過程で起こる、統計的先制や過剰般化が深く関連する現象(Goldberg, 2019)である。Goldberg (2019)によると、統計的先制は「語の形がお互いの意味をめぐって競合すること(筆者訳) (p. 23)」をいい、過剰般化については先行研究を引きながら、「初級学習者がまだ語彙をあまり知らない状況で、対象言語において慣習的でない方法で、ある表現を過剰に使用すること(筆者訳) (p. 24)」と述べている。*because* の過剰使用自体は、筆者の意図の伝達においてはそれほど大きな問題ではないかもしれないが、過剰使用により表現が一様になってしまう。このことは、ライティングの評価でその指標の一部として重要な語彙多様性 (Matthews & Wijeyewardene, 2018)を阻害する可能性があるため、改善すべき問題

であることを認識しておく必要がある。

過剰使用が生じる背景にはどのような現状・問題点があるのであろうか。高等学校の英語授業での作文で **because** 使用問題が生じる教育的背景には、次の 3 つの問題点があると考えられる。1 点目は、**because** は中学既習語として扱われ、高校教材で取り扱われないことである。中学校で導入済みなので、高校入試の短い英作文でも **because** は多用されており、高校教員は授業で取り上げるまでもないという認識である可能性がある。2 点目は、前述のように、**because** は使用上問題点がないと認識されやすく、語法に特化した指導が少ない点である。あまりにもよく使われるので、理由表現といえば **because** と定番化してしまい、そのことで **because** の用法は振り返られることが少ない。3 点目は、作文添削でも意識されにくい点が挙げられる。作文添削で焦点が当たるのは主語と動詞の形の一致、時制や構文のエラーなど、教科書や学習参考書で、日本人学習者が間違いやすいと言われる文法・語法事項である。その結果、高校生は **because** を使用はするが、その他の理由表現や語法を知らない可能性があり、過剰使用や誤用の文頭断片文使用の問題は学年が上がっても解消しない。

では、現在日本での高校英語教育で、**because** に関して高校生が入手できる情報はどのようなものだろうか。次節では高校生が入手可能な **because** 情報について見ていく。

## 2. 日本の高校英語教育における **because** の扱い

第 1 節で見てきたように、日本人高校生の英作文での **because** 使用には過剰使用や断片文使用の問題があった。それらのアウトプットはインプットと関係がある可能性がある。そこで、高校生が参照できる情報、教員の参照できる情報について調査分析することで **because** について高校生が入手可能な情報の現状を概観する。

### 2.1 高校生が参照できる図書からの情報

高校生が **because** について得られる情報はどのようなものであろうか。情報を把握するため、高校生用辞典・参考書 9 冊で **because** の語法に関する記述を調査した。対象書籍の選出では、現在も継続的に広く使用されているもの、または書店に並び、できるだけ発行年の新しいものとした。

#### (1) 高校生対象英和辞典:

- |                        |                    |
|------------------------|--------------------|
| 『ベーシックジーニアス英和辞典』(2002) | 『オーレックス英和辞典』(2013) |
| 『ウィズダム英和辞典』(2013)      | 『ジーニアス英和辞典』(2014)  |
| 『エースクラウン英和辞典』(2020)    |                    |

#### (2) 高校生対象英文法参考書:

- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| 『英文法解説』(1999)    | 『ロイヤル英文法』(2000)   |
| 『1 億人の英文法』(2011) | 『Evergreen』(2017) |

(1), (2)から得られた because の語義・用法に関わる記述を表 1 に示す。

表 1  
各種参照図書における because 記述の概観

	掲載状況	英和辞典	文法参考書
語義	4 冊以上に掲載	1. なぜなら…だから 2. なので 3. …だからといって(ではない)	1. なので
	3 冊以下	1. だから 2. …というのは 3. …ということ	1. だから 2. …だからといって(ではない)
用法	3 冊以上に掲載	・Why 疑問文の答え以外で Because 断片文の使用不可	・because は直接の原因を表す ・since, as 等他の接続詞との違い
	2 冊以下	・最重要情報なので文後半に	—

表 1 では、語義で英和辞典 4 冊以上に掲載されたものは、一般的な「なので」の他に、まず「なぜなら…だから」と理由を強調したり、「…だからといって(ではない)」と限定的な理由を表したりする表現が掲載されていた。文法参考書での語義は辞典ほど豊富に記載されておらず、共通して、「なので」の記述だけであった。用法では、英和辞典では because 断片文の使用は why 疑問文以外では不可であることや情報の新旧について、文法参考書では because を使用する文脈やその他の原因接続詞との違いが掲載されていた。全体的に辞典と比べると、高校生が自学によく用いる文法参考書では because に関する情報自体が少ないことが分かった。

## 2.2 教員が参照できる図書からの情報

高校生が主として英語の語法情報を得るのは、英語の授業において、高校教員からである。そこで教員が授業準備で参照できる情報を把握するため、英文法・語法専門書の because に関する記載を調査した。対象書籍は 1. *A Comprehensive Grammar of the English Language*, 2. *Longman Grammar of Spoken and Written English*, 3. *Practical English Usage* の 3 冊を選んだ。このうち *Longman Grammar of Spoken and Written English* 以外の 2 冊については実際に現場の教員が所持していた 2 冊である。

これらの 3 冊では共通して、because は理由を強調したいときに使い、文後半にくることが大半であるとされていた。*A Comprehensive Grammar of the English Language* で Quirk, Greenbaum, Leech, & Svartvik (1985) は、副詞を修飾の方法により 4 種 (adjuncts, subjuncts, disjuncts, conjuncts) に分けている。そして、because 原因節を、大きく adjuncts (付加詞), disjuncts (離接詞) の 2 点に分類した。adjuncts は、文の主要素と似た文法的性質で節

構造に組込まれ、理由の周辺情報を表し、disjuncts は、文の主要要素の外にあり、主節への評価を表す。理由節を含む付随状況は disjuncts で表されることが多いが、理由や目的では adjuncts も使われること、adjuncts の because は原因・理由が欠かせないので文に統合されることが多く、disjuncts の because はコンマの後に置かれ出来事に対する真偽の判断や評価を表すことなど、文中位置での機能の変化に言及した。London-Lund corpus と Lob corpus の頻度調査の結果として、理由表現・文中位置別頻度表より because 使用は文後半に見られることが多いことを報告している。*Longman Grammar of Spoken and Written English* で Biber, Johansson, Leech, Conrad, & Finegan (1999) は、言語使用域に焦点を当て、because がどの使用域でも一番使われる選択肢だと述べた。because は as, since を含む 3 つの従属接続詞の中で唯一明確に理由を表すので、最もわかりやすい選択肢であり、特に会話での理由表現の多用は、話者が自分の考えや感情、行動を説明する必要があるからだとしている。because の文中位置については、理由を含む付随状況の副詞表現は節を好み、会話と小説で文後半に、ニュースや学術論文では半数弱が文後半以外の位置でも起こるとして、ジャンル間の差異についても述べている。説明文では、多くの文頭の理由節は既知情報であり、推測可能な情報を主節の新情報の理由として使うなど、情報の新旧が理由表現の語彙選択に影響することに言及している。*Practical English Usage* で Swan (1980) は、because は理由を強調するとき、聴き手や読者が知らない新情報を導入するとき、そしてある事を知った経緯を述べるとき使われるとしており、because の意味の強さや新情報の伝達について細かく解説している。

### 2.3 小括

以上から英和辞典・学習参考書で because を過剰使用すべきでないという情報はほぼ指摘がなく、上級者用辞典にも掲載されていなかった。文頭使用の注意点は 3 分の 2 に掲載されていたが、実際には英作文での文頭断片文使用が多く見られる。英文法・語法専門書では、2.2 で概括したように詳細な語法は掲載されているが、外国語学習者の使用傾向や誤用情報の記載は皆無であった。文頭位置での使用は、それほど多くはないが文脈上使用可能であることが分かった。これらから、高校生が入手できる情報ではまだ問題解決には不十分で、母語話者や高校生学習者の使用実態を踏まえた指導方針決定の必要性があることが判明した。

## 3. 先行研究

本研究の目的に関連した先行研究は多岐にわたるが、日本人英語学習者の because を含む理由表現使用や接続表現使用という観点からの研究に絞り、得られた知見の概要を見ていく。

### 3.1 理由接続詞 because の誤用分析

小林(2009)は、日本人英語学習者の接続詞・接続表現の習得過程の研究一例として、数種のコーパスを使い、母語転移、文体の混在、教材の影響の 3 点から because の誤用である断片文分

析をして多角的解釈を試みている。研究設問として、学年が上がるにつれ(1) because の頻度・生起位置はどのように変化するか、(2) because で始まる断片文は量的・質的にどのように変化するか、(3) 何が because の誤用を引き起こすのかの 3 点を設定し、調査分析を行った。使用データは(1)日本人中高生の英作文コーパス JEFLL Corpus, (2)日本人大学生英作文を集めた ICLE サブコーパスである JP-ICLE, (3)中学校検定教科書 4 社の電子データを用い、定量的・定性的に上述の 3 つの視点から誤用の原因を分析した。

その結果、中高大と学年が上がると because 頻度は下がるが断片文使用率は 8 割以上と高く変わらないこと、誤用は 3 タイプで、A.主節の脱落、B.主節なし従属節が等位接続詞により拡張、C.主節なし従属節の入れ子使用であり、誤用の原因は英語と日本語の文体差「なぜなら～だからだ」の影響、中学校教科書での主に会話文文例によるインプットの影響の可能性を示唆した。

### 3.2 理由接続詞 because 節の文中位置に関する考察

藤本(2010)では、because 節が主節に先行する場合と後続する場合で何が違うか、頻度の違い、情報伝達効果の違いなどの視点での考察を目的として、日本人大学生の because の文中位置調査がなされた。使用データは大学生 96 名 (A.教職課程(英語)教育学部 2 年生 23 名, B.教職課程(英語)文学部 2 年生 29 名, C.文学部 1 年生 44 名からの質問紙回答で、(1)理由を表す接続詞を用いた和文英訳、(2)理由を表す接続詞の使い分け学習経験の有無 (3)文頭使用が間違いと聞いた経験の有無の 3 点について尋ねたものである。得られた回答を確認し、和文英訳で出てきた英文のパターンを計測し、その他回答を定性的に分析した。

その結果、(1) 学生の英作文は、because がクラス A(69.6%)、B(69.0%)、C(54.5%)の全てで最多であること、(2) because 使用の文中位置内訳は、SV because SV.56.2%、SV, because of A. 17.8%、SV, because SV. 16.4%、Because SV, SV.は 6.9%、SV. Because SV. 2.7%であったこと、(3)学生は as, since など類語の使い分けを知らないが、文頭使用が誤りと習った経験はあると分かった。(4)調査の結果、because 文頭使用も可能という結果を得た。この結果から、文中位置と情報の重要度、情報・談話の流れの観点を取り入れた指導の必要性を示唆している。

### 3.3 日本人大学生の論理コネクタ使用傾向

Narita, Sato, & Sugiura (2006)は、日本人大学生と英語母語話者の書き言葉での論理コネクタ使用を JP-ICLE, LOCNESS-US コーパスで比較した。コネクタの選択では Quirk et al. (1985)の「接続詞」のリスト、コーパスベースの Biber et al. (1999)作成の「接続副詞」のリストも参照し、研究対象として 25 の論理コネクタを選出した。そして、日本人大学生とフランス、スウェーデン、中国の上級英語学習者の間で、その使用を比較した。

その結果、英語を母語とする学生は、文頭位置でコネクタを使用するのと同じ程度にコネクタを文の中程の位置で使用するが、日本の EFL 学習者は文頭位置を強く好む傾向が明らかになった。その理由として学習者が 2 文の結束性を確保しようとした可能性、表現使用法が分からず文中位

置を気にしない可能性を示唆した。

### 3.4 先行研究の課題と本研究の方向性

先行研究の課題は 4 点である。1 点目は、日本人学生という広範な because 頻度研究はあるが、高校生の使用に注目し、学年上昇に伴う変化の分析は少ない点である。2 点目は、because 文中位置の日本人学生の誤用研究はあるが、誤用も含め文中位置の総合的分析は少ない点である。高校生学年ごとの頻度を観察して母語話者と比べ、because の過剰使用の程度を知り、断片文を含む文頭使用率を観察して、誤用の学年上昇に伴う増減傾向を見て実態を把握しなければ、どのように高校生の使用を軌道修正したらよいか分からない。3 点目は、大学生の because 文型使用を調べた研究はあるが、高校生を対象としたものは少ない点である。4 点目は、高校生と母語話者に特徴的な文型について分析した研究は少ない点である。これらの詳細な実態を把握せずには、高校生に示すべき because 使用の明確なインプット情報を得ることができない。

これらの課題解決のため、4 点に注目する。1 点目は、高校生作文データから各学年で because 頻度を抽出し使用の変化を辿ることである。2 点目は、正用と誤用の両観点で使用実態を知るため、because の文中位置に注目して高校生の使用特徴、母語話者の使用傾向を明らかにすることである。3 点目は、抽出文脈から高校生と母語話者英作文での総合的な because 使用文型の頻度を調査し、使用の変化を確認することである。4 点目は情報量の多い文型パタンの頻度を統計的に整理し、客観的にどのような使用文型パターンがどの書き手群を特徴づけるかを把握することである。これらにより、過剰使用や断片文使用問題の原因を探る手掛かりを発見する。母語話者使用からは高校生の目指すべき使用パターンが判明し、高校生使用からは、特徴づける文型の変化から学習者が言語使用に習熟する経緯、またその躰きを具に観察できると考えられる。

## 4. 研究設問・研究手法

### 4.1 研究設問

本研究の目的は日本人高校生の because 使用問題に関し、(1)学年進行による変化、(2)高 3 段階での母語話者との乖離度を計量的に解明することである。この目的に沿って以下の 4 つの研究設問を設定した。

RQ1 使用頻度はどう変化するか。

RQ2 文頭使用率はどう変化するか。

RQ3 多用される文型はどう変化するか。

RQ4 書き手群を特徴づける文型は何か。

### 4.2 使用データ

本研究の使用データは JEFLL Corpus 高校生サブコーパスデータと、ICNALE Written Essays の母語話者データである。JEFLL Corpus は東京外国語大学投野由紀夫氏により作成

され、2007 年に公開された中高生約 1 万人による英作文コーパスである。総語数 67 万語、トピックは論説型作文用には「朝ごはんにはパンがいいかご飯がいいか?」「大地震が来たら何を持って逃げますか?」「お年玉〇万円もらったら、何を買いますか?」の計 3 トピック、叙述型作文用の「あなたの学校の文化祭について教えてください」「浦島太郎のその後について想像して書きなさい」「今までに見た怖い夢について教えてください」の計 3 トピックの合計 6 種類である。執筆条件として執筆時間 20 分、辞書使用禁止、英語不明箇所は日本語ローマ字表記が許されている。データ構成は中 1～高 3 の 6 段階が設定され、論説型、叙述型などトピックカテゴリや学年の指定でサブコーパスを作成し、サブコーパスごとに頻度検索もできる。本研究では高校生各学年、論説型 3 トピックに該当する作文のサブコーパスを作成した。

ICNALE Written Essays は神戸大学石川慎一郎氏により作成され、2013 年に公開された書き言葉(作文)コーパスである。アジアの英語学習者、母語話者総参加者 2,800 人、5,600 サンプル、約 130 万語を収録し、トピックは 'It is important for college students to have a part-time job.' または 'Smoking should be completely banned at all the restaurants in the country.' の 2 種類への是非を問う形式である。執筆条件として、執筆時間は 20～40 分、200～300 語、辞書使用禁止とし、データ収集条件を揃えることで比較の妥当性が徹底されている。このコーパスには日本人をはじめ、韓国人、中国人などアジアの様々な国々の学習者の英作文データが収録されているが、その中に同じトピック・条件で書かれた英語母語話者データも含まれており、それらを取り出してサブコーパスを作成できる。本研究では母語話者(ENS)サブコーパスデータのみを用いている。

JEFLC Corpus と ICNALE Written Essays ではトピックが違うため厳密な比較は難しいが、データの信頼性を高めるため多くのサンプル数を確保できる JEFLC Corpus を、制限時間付作文コーパスという共通点から、比較対象として ICNALE Written Essays の母語話者作文データを選び、ICNALE Written Essays とのトピックを出来るだけ合わせる点から JEFLC Corpus 高校生サブコーパスの argumentative essays のデータのみを選出した。

#### 4.3 手法

RQ1(使用頻度)では、JEFLC Corpus から高校生各学年論説型作文のみのサブコーパス 3 つ、ICNALE Written Essays から母語話者作文データのみで 1 つの計 4 つのサブコーパスを作成し、それぞれから because 頻度を抽出した。1,000 語あたりで調整頻度に換算(サブコーパス because 頻度/サブコーパス総頻度\* 1,000)し、グラフ化した(接続詞に焦点を当てるため、because of は除く)。頻度差の有意性の確認は抽出した頻度の粗頻度で高 1-2、高 2-3、高 3-ENS 間でカイ二乗検定(イエイツ補正あり)を 3 回実施した。検定の重複による第 1 種の過誤を防ぐため、有意水準を  $\alpha < .01$  に設定した。

RQ2(文頭使用率)では、各サブコーパス文頭 because 率(文頭 because 頻度/ because 総頻度\* 100)を計算し、グラフ化した。頻度差の有意性の確認は抽出した文頭 because 使用頻度の

粗頻度で高 1-2, 高 2-3, 高 3-ENS 間でカイ二乗検定(イエイツ補正あり)を 3 回実施した。検定の重複による第 1 種の過誤を防ぐため, 有意水準を  $\alpha < .01$  に設定した。

RQ3(各文型使用率)では, because 使用文型を正用 3 文型(A. Because SV, SV., B. SV, because SV., C. SV because SV.)と誤用断片文(E. SV. Because SV. )の 4 種に分け, 各サブコーパスのコンコーダンスラインから目視で頻度抽出し, 百分率換算してグラフ化した。

RQ4(書き手群・多用文型特徴)では, 書き手群ごと各文型使用の粗頻度をもとに書き手群(サブコーパス)を第 1 アイテム, 使用文型を第 2 アイテムとして対応分析を実施し, 各書き手群の特徴となる使用文型を整理した。対応分析とは, 頻度表の行と列を組み替えて, そこに含まれる多変量情報を少数の次元に圧縮することで整理する統計的手法である。データの視覚的布置により, 直観的解釈を容易にする利点がある(石川・前田・山崎, 2010, p. 245)。

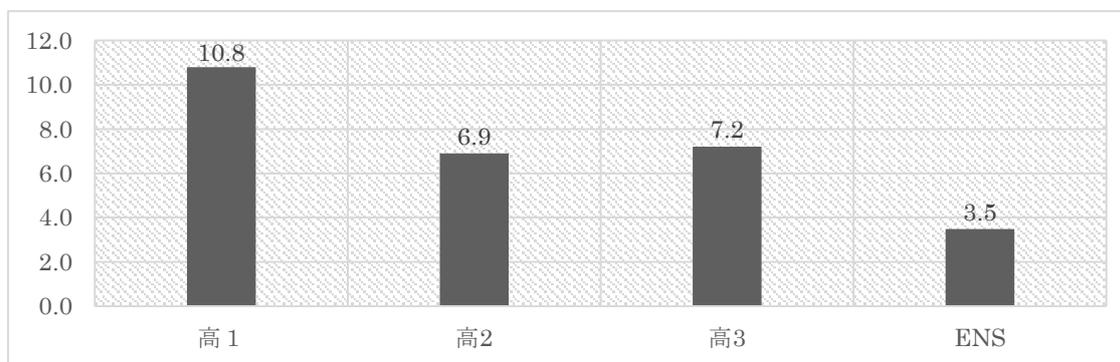
## 5. 結果と考察

### 5.1 RQ1 使用頻度の変化

高校生と母語話者データでの 1,000 語ごとの because 頻度調査結果を図 1 に示す。

図 1

高校生および母語話者(ENS)による because 使用量(1,000 語当たり調整頻度)



各学年頻度では, 高 1 と高 2 間で有意な頻度差があり( $\chi^2=61.78$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ ), 高 2 から高 3 の頻度上昇では差がないと判明した( $\chi^2=0.22$ ,  $df=1$ ,  $p=.637$ )。ここでは, 高校 3 年間では, 小林(2009)での「学年が低いほど過剰使用する」という結果を支持しないと分かった。このことから, 高 1 から高 2 で, 授業などでのリーディングやリスニングからの自然なインプットで正用に触れることで過剰使用が矯正されるが, 中学校でのインプットの影響が強いため床効果が発生し, 明示的指導なしには, 高 2 以降の頻度減少へと繋げにくい可能性が示唆された。高 3 と母語話者(ENS)間では有意な頻度差があり( $\chi^2=76.92$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ ), 小林(2009)の日本人学習者の because 過剰使用は本研究でも統計的に確認された。

以下に日本人高校生と英語母語話者の because 頻度の違いを表す代表的用例を各 1 点示す。(スベリングミスもそのまま転載, 下線は筆者による)。

(2) ... First, I will take my family. Because most important thing is my family's health. And then, I will take my friends. The reason is same. Then I will take telephone, radio, water, foods, lights, and coat. Because I will be able to ask for help if an earthquake happen again. And I'll be able to catch news. The reason hat I take water and foods and lights and coat are needless to say. And I'll take my money. Because I have just given [JP:Otoshodama], so I haven't bought anything yet. And I'll take my necklace and bags which I have been bought in travel by my father. Then, I'll take my favorite books which are very interesting and moving, and CDs. Then I'll take the photobook that in present by my favorite friends. And I'll take my clothes that I love. Then I'll take my texists and notebooks, because I must study. I have things that I want to take so much th... (S1 earthquake 06100)

(3) I think that most people would agree that having a part-time job is a good option for a student. I've had a part-time job since my first semester of college and I have learned a lot from working there. Most of my friends complain that they do not want to find any part time job because they are already very busy with their schoolwork and their social lives. It is true that having a part-time job sometimes makes it difficult to find time to do everything that you want or need to do, but putting yourself in situations in which you're a little bit uncomfortable is one of the best ways to grow and become stronger as a person, student, and an employee. What's more, by having a part-time job I can make enough money to fund all of my personal expenses such as food, rent, and entertainment. The fact of the matter is that my friends who do not have money cannot have as much fun as I have or have as much freedom as I have. It sometimes seems sad, but money really is power. If you have a part-time job, you can make money, you can gain skills, and you can make professional contacts.

(W\_ENS\_PTJ0\_013\_XX\_1)

以上の日本人高校生と英語母語話者の用例での because 頻度は、それぞれ 162 語中 4 回、207 語中 1 回(カンマ、ピリオド含まず)となっている。これを見ると、圧倒的に日本人高校生は 1 つの作文中で because を過剰に使用している実態が現れている。ここで、JEFLL Corpus では作文 1 本の全体データを入手することができないため、用例は作文の一部であること、高校生の用例は最も頻回に because の過剰使用の見られたものの中の一例であること、母語話者の中には 1 作文中に複数回 because を使用したのもなかったわけではないことを付言しておく必要がある。それ

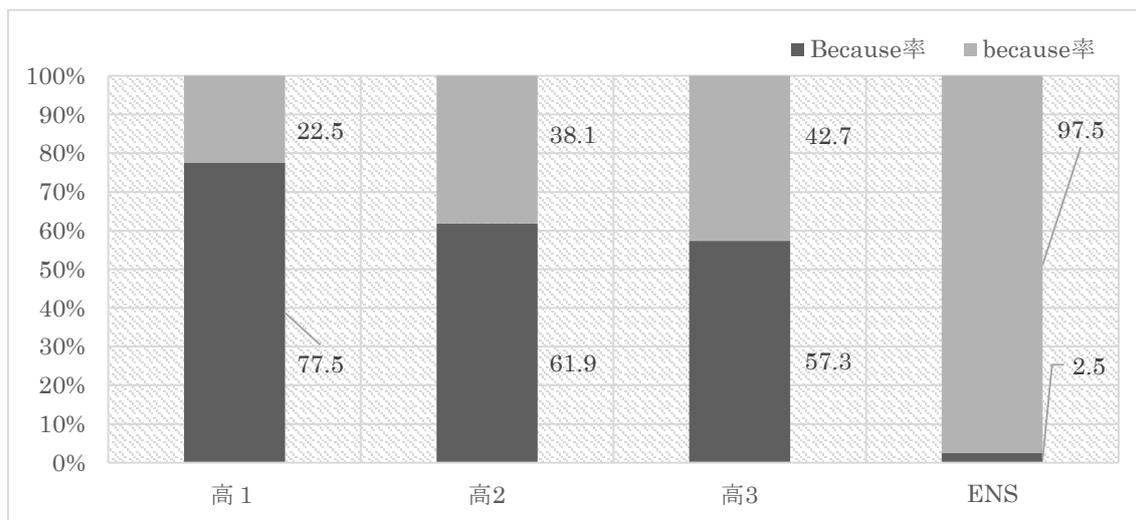
を差し引いても、高校生と英語母語話者との使用頻度の差は歴然としている。

## 5.2 RQ2 文頭使用率の変化

高校生と母語話者(ENS)の because 頻度中の文頭使用率調査の結果を図 2 に示す。

図 2

高校生・ENS 文頭 Because 使用率(%)



全体の変化を見ると、高1から高3で文頭 because 使用の減少が見られたが、高校での学習最終段階である3年生でも全体の半数以上が文頭 because 使用であった。さらには全学年の文頭使用のほとんどが断片文(小林, 2009)で誤用のまま使用されていることが判明した。高校学年間の頻度におけるカイ二乗検定では高1と高2間のみ有意な頻度差があった( $\chi^2=98.03$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ )。高2から高3にかけては文頭使用の減少が緩やかになるものの、高3と母語話者(ENS)とを比較するとその差は顕著で( $\chi^2=333.87$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ )、日本人学習者は接続表現(本研究では接続詞)で文頭位置を強く好む(Narita et al., 2006)傾向が本研究でも支持された。

使用頻度と文頭使用率を示す文例を以下に挙げる。JEFLL Corpusからの例文は短いもので1作文全体の記載もあれば部分の場合もある(スペリングミスもそのまま転載、下線は筆者による)。まず高校1年生の用例である。

- (4) I eat breakfast every morning. Because I'm hungry. But I don't eat [JP:お味噌汁] these days. Because It is hot. I don't eat [JP:パン] in the morning. Because I eat it many times, and I don't like [JP:味]. I drink tea every morning. Because I like tea very much. But I don't like green tea. Because green tea is [JP:味が濃い].  
(S1 breakfast 09691)

ここでは、グラフでも見られたように文頭使用が圧倒的である。用例(4)では、作文中の 5 つ全てが文頭使用である。小林(2009)も指摘するように、中学校での主要なインプットであった、会話での Why 疑問文への応答の Because SV が頭から離れず、本来は前後の文と繋がるべきである because 節を独立させてしまった可能性がある。次に高校 2 年生の用例を以下に示す。

(5) And, most important season that I select rice is healthy. Because bread [JP:(つける)] a batter or jam, I think it is high-caroly, Rice is no oil. Finaly, because I am Japanese, I eat rice at the breakfast everyday. (S2 breakfast 07036)

高校 2 年生になると、文頭断片文の使用もまだ存在するが、(5)のように文頭使用の正用例、つまり主節も存在する文頭使用が見られ始める。これは 1 年生時から 2 年生までのインプットで書き言葉を見る機会が増えたため、because 節には主節が必要だという文法規則に気づいて主節を付加し始めた可能性がある。次は高校生最終段階の 3 年生の用例を見ていく。

(6) Because I'm not in that situation, I can't say exactly what I will bring, but maybe I will bring my [JP:yokin\_tsuuchou]. Third, because it is compact and I remember where it is, I can bring it easy and quickly. (S3 earthquake 09413)

ここでも高校 2 年生の使用と同様に、大文字や小文字で始まる because が見受けられるが、両方とも主節を伴った文頭使用となっている。その他の部分の文法・語法の使用を比較するとここで挙げられた高 2 生と高 3 生の作文には明らかな違いがあり、その部分では高 3 生の作文の習熟度が高いと考えられるが、because の使用だけに焦点を当てると同じレベルであるといえる。最後に英語母語話者の用例を見ていく。

(7) …We have a tremendous amount of reading to do, just to try to keep up with our workload. For me to pass with high scores, I know that I couldn't possibly take on a job and still perform at a high level. On that basis, I don't believe that it is important for students to have a part-time job because I believe, for me anyway, that it is more important to focus on studies and let the jobs come later. (W\_ENS\_PTJ0\_001\_XX\_1)

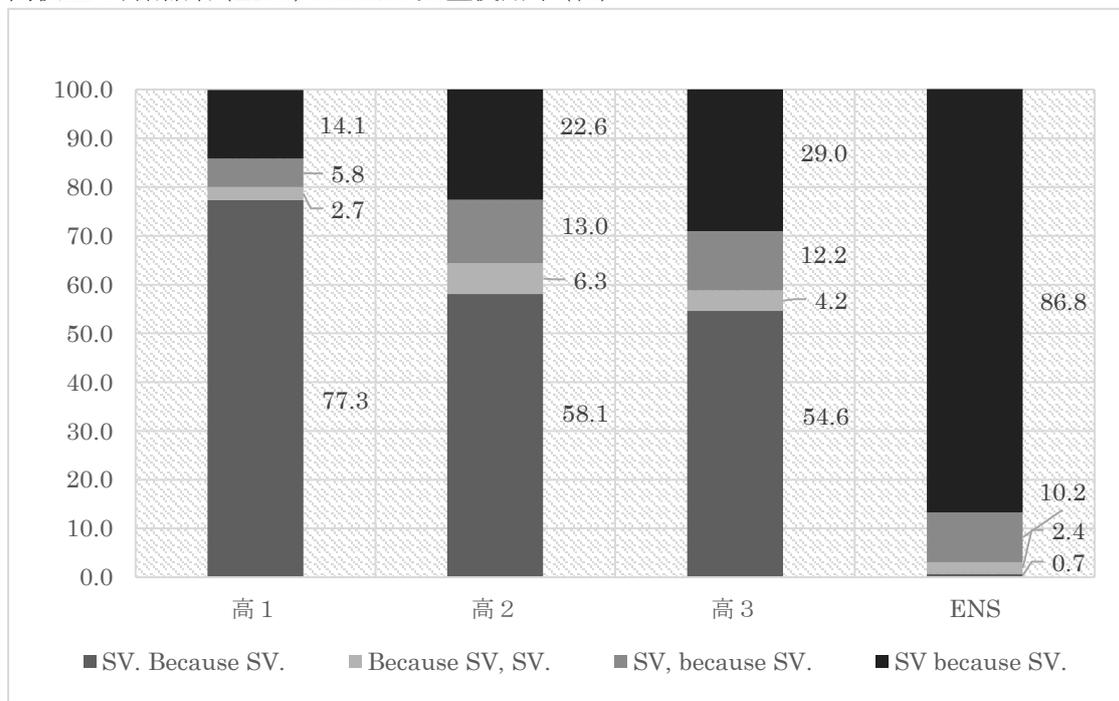
母語話者の使用では、用例(7)のように文中位置で because を用いる用法がほとんどであった。このことには理由の強弱とともに、文の結束性という観点から、旧情報と新情報への流れが影響している可能性がある。この文例でも、because の前文はトピックの情報が入っているので旧情報、後文は前段を踏まえた自らの意見の総括という新情報となっている。

### 5.3 RQ3 多用される文型の変化

高校生と母語話者の because 使用文型の調査結果を図 3 に示す。

図 3

高校生・母語話者 (ENS) because 文型使用率 (%)



全体的な使用文型の頻度推移では、学年が上がると断片文が減り正用使用と文型多様性が増加する。しかし、母語話者 (ENS) 使用とは分布が明らかに異なり、高校生の文型使用と母語話者使用との間には大きな隔たりがあることがわかる。他学年と比べ高 2 での文頭 because 正用使用の増加は、学習者が文頭を好む傾向と、自然なインプットからの主節の必要性への気づきの影響が混在した段階にいることを示す可能性がある。英語母語話者ではほぼ文頭使用が見られない原因に関しては推測の域を出ないが、Garner (2016) で述べられるように、英語圏で誤用を避けるため because 文頭使用をしないよう学校で指導される影響の可能性が考えられる。

ここまでは RQ ごとに頻度の増減やその差に焦点を当て、高校生各学年の変化や母語話者との傾向の差異を考察してきた。同じデータで次節では統計的手法により分析をし、結果の考察を行う。

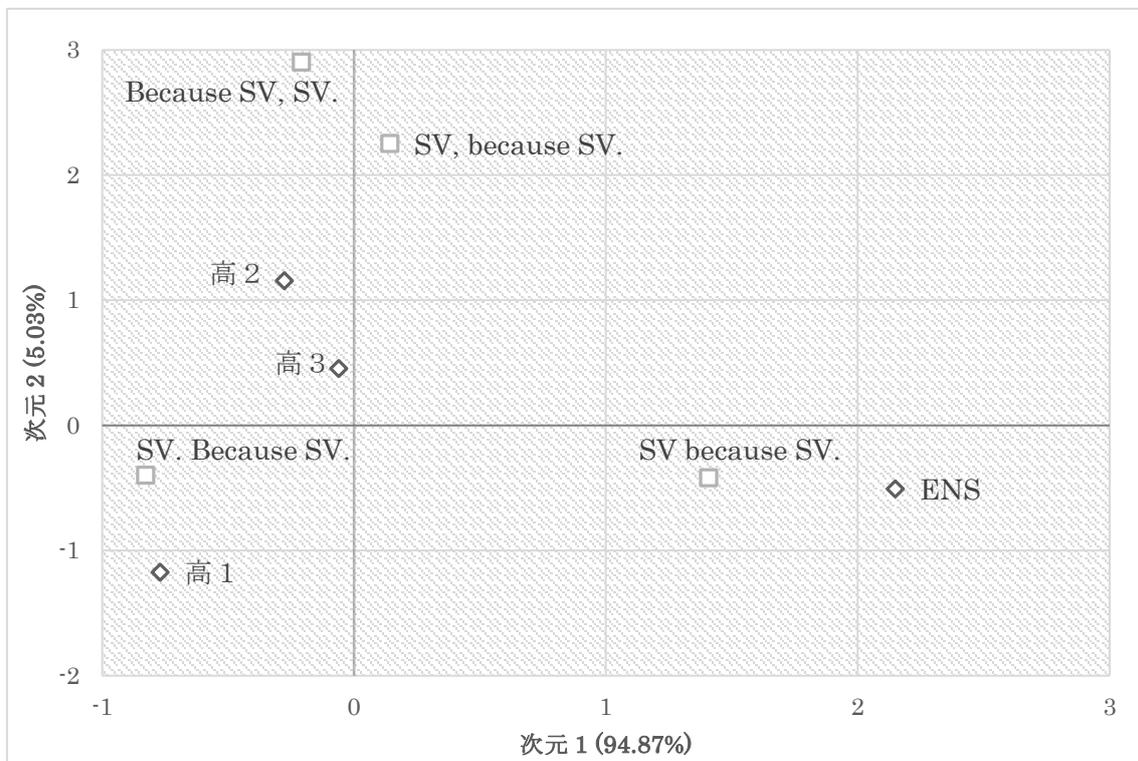
### 5.4 RQ4 書き手群を特徴づける文型

ここからは多変量解析の手法によって、高校生の各学年、母語話者を統計的に特徴づける文型を分類整理し、その結果に基づいてより客観的な各書き手群の特徴を中心に考察する。各書き手群が特徴的に使用する文型情報を把握することで、モデルとしての母語話者の特徴、各学年の特徴から作文指導の観点を得ることができる。

高校生各学年, 母語話者(ENS)を特徴づける文型に関する対応分析の結果を図 4 に示す。

図 4

書き手群別, because 文型別の対応分析散布図



この分析では第 1 アイテム(書き手群)が 4 カテゴリであったため 3 つの次元が取り出された。このうち各次元の寄与率に注目すると, 第 1 次元の寄与率が 94.87%となっており, 事実上データは第 1 軸(横軸)上の左右で区別されることが分かった。そこで, まず第 1 次元の特徴を考察することとする。第 1 次元は右側に母語話者(ENS)を, 左側に日本人高校生を区分している。このことから, 第 1 軸は母語話者と非母語話者(日本人高校生)を分ける軸となっていると解釈できる。また, 4 群の書き手が第 1 軸上で左右に分離されていることは, 高 3 を含め日本人高校生と母語話者間には because の使用において根本的な質的差異があることを示している。次に第 2 軸の解釈について考察することとする。第 2 軸は上方に高 2, 高 3, 下方に高 1 が区分されている。このことから, 日本人高校生の学年進行ないし習熟度を分離する軸であると考えられる。ここで注目すべき点は, 高 2, 高 3 を比較するとこれらの書き手群の相対的距離は近いものの, 高 1 と距離が近いのは高 2 ではなく高 3 だということである。このことから, 高 1 から高 2, 高 2 から高 3 という学年進行での because 使用の発達が発達した線形的変化でないことが分かった。そして, 高 1 からそれ以降の学年に対しての大きな開きは認められるものの, 高 2 と高 3 の間に明確な because 使用の発展は認められないこととなった。ただし, 前述のように第 1 次元と比較すると第 2 次元の寄与率はきわめて制約的であるため, 今回高 2 と高 3 の間に見られた質的な相違に対しての相対的影響は少ない

ものであることを併せて言及しておかなければならない。

以上を踏まえて、ここで各書き手群を特徴づける **because** 使用文型を見ていくこととする。まず第 1 軸右側に布置される母語話者を特徴づける文型は **SV because SV** 型であり、それに次いで **SV, because SV** 型であると分かった。ここで母語話者作文より各用例を以下に示す(下線は筆者)。

(8) This work study job is really great because I am allowed to study when the weight room is not busy, and this allows me to keep up with my schoolwork while I make a little bit of spending money. (W\_ENS\_PTJ0\_018\_XX\_1)

(9) This came as quite a shock to me, because my parents have always strongly discouraged me from smoking or using any kind of tobacco products. (W\_ENS\_SMK0\_011\_XX\_1)

**SV, because SV.** の文型は **SV because SV.** の文型と比べるとやや限定的であり頻度は減るものの、これらの文型は両者ともに英語としては一般的なものである。グラフ上において日本人高校生のデータがそれらの文型とは離れたところに布置されていることは、彼らがこれらの文型を使えていないことを意味している。そして、それを反映して、これらが母語話者を特徴づける文型として現れてきたと解釈できる。教育的応用の視点で考えると、上記 2 つの文型を母語話者によく使われる文型として日本人高校生に教示する必要がある。

それでは日本人高校生を特徴づける文型とはどのようなものなのであろうか。以降学年ごと書き手群に沿って特徴を見ていく。最も学年が低く習熟度も低いと考えられる高校 1 年生を特徴づける文型は **SV. Because SV.** の断片文と呼ばれる誤用の形であった。本研究の目的の 1 つとして、高校生の英作文での断片文使用を引き起こす原因を探り、改善策を示すことがある。したがって、断片文使用について特に注目し、以下にそれらの例文を示すとともに、それらから書き手群が断片文を使った原因・理由を考察する。

(10) I will bring money first. Because money is very useful. (S1 earthquake 05619)

用例(10)では書き手はお金がお金が便利だということを **Because** 以降で **very** を用いて強調したい意図から、日本語の「Sは～である。なぜなら…だからである。」という強調体の日本語をそのまま英語にして断片文が使用された可能性がある。

(11) If I can't listen to my favorite music, I won't be able to live !! Because, I spent really lots of money for them. (S1 earthquake 06125)

用例(11)でも **because** 以降の文で理由を強調する意図が感じられることから、用例(10)と同様

に日本語の理由表現の強調体をそのまま適用した可能性がある。また、**Because** の前後に注目すると、日本人のカジュアルな書き言葉でよく見られる「!!」の形や **Because** 直後のコンマなど、日本語の表記法もそのまま適用して英訳している様子が見えてくる。

(12) I like both bread and rice. Because I want to be strong. (S1 breakfast 09741)

用例(12)では、これまでの2つの用例と同様に、日本語の語順のままに断片文を使用していると考えられる。特徴的に **like** や **want** など思考動詞以外の動詞を用い、**Because** 前後の内容において、論理的な理由付けをするというよりは感覚的に理由を述べているといえる。以上が高校初級者である高校1年生の **because** 使用の特徴である。

最後に高校2年生、3年生だが、これらの書き手群は同じ象限に布置されている。グラフ上のデータの動きでも高1生から高2、高3生にかけては縦方向に比較的大きく変化し誤用から離れていくことから、これらの学年はそれぞれ高校段階での中上級者といえる。ここで用例を見ながらその特徴を見ていくこととする。高2、高3生は **Because SV, SV**型で特徴づけられる。以下に用例を示し、用例から見える傾向を考察する。

(13) Because we are Japanese, Japanese should eat national food.

(S2 breakfast 06389)

(14) Because I will take college exam this winter, I have no time.

(S3 otoshidama 09154)

高校1年生の用例と比べると、断片文を避け、主節と従属節を用いて文法的に正しい文で書くことはよく理解出来るようになっていくことがうかがえる。しかし、母語話者の使用とは異なり、これらの日本人中上級高校生の用例では **because** 節の方を前置している。この原因として考えられるのは、日本人学習者が「A なので B である。」という、原因から理由へと流れる日本語の論理構造をそのまま適用して英文を書く傾向があるためであると考えられる。これに対し英語では、重要な内容に焦点を当てる、重要性のフォーカスの論理構造がある。そのため、特別な条件がないときは、原因と結果において、重要な結果の方が前置されるのが英語の特徴である。つまり、英語では最も大切な情報が前にくる傾向があるという論理構造の認識が重要である。今回のデータ分析の結果からは、この英語の発想が、母語話者と日本人高校生を分割している要因であるといえる。

このようにグラフのデータ配置を概観すると、高校生学習者は不規則な変化とともに誤用の断片文から遠ざかるが、母語話者の使用とは距離があり近づいてはいない。これは冒頭でも述べたように、現状で **because** 使用に関するインプットが不十分で、母語話者使用を意識し明示的に指導する工夫がないと、その使用に届かないことを意味していると考えられる。この結果からも、望ましい

because 使用を例示しながらの明示的インプットの必要性が示唆されたといえる。

## 6. まとめ

### 6.1 本研究で得られた知見

本研究で得られた知見は 4 点である。1 点目は、英語母語話者の because 使用ルールと実際の使用の関連性である。2.2 節で教員向け参照図書から得た英語母語話者の because 使用情報は、実際に調査した英作文コーパスでの母語話者の使用傾向により裏付けられた。母語話者は because を正当化など強い理由に使い(田中, 2015) 理由の焦点化として使用する。そのため、その節の情報が新情報となり、文脈上文後半にくることが多いとされる。RQ1 と 2 の結果からも、母語話者の because 使用の多くが SV because SV. で理由を表し、作文中で 1, 2 度しか使われない傾向が観察された。

2 点目は、高校英語授業での because 使用に関するインプット不足の可能性である。because は作文で論理展開上重要な語だが、中学既習語のため高校での扱いが少ない語である。本研究の調査でも、本来読解や聴解等のインプット量の増加に伴いある程度は減少するはずの頻度が、データでは高 2 から変化しない様子が観察された。これはやはり現場の指導が不十分な可能性があり、結果として使用頻度減少に床効果が生じていると考えられる。授業で、情報源である辞典情報を用いて使用の注意点を繰り返し示すなど、体系的な明示的指導をすることで、問題点が高校生意識に上り、過剰使用や断片文などの問題改善に繋がる可能性(田畑・大井, 2012)がある。

3 点目は、授業でのインプットがそのまま学習者の使用に繋がる可能性である。文型使用の習熟段階の観察のため文例を観察すると、中学校で習う Why 疑問文と Because 断片文(小林, 2009)の組合せが高校 1~2 年生で多用される様子が見られた。高校 2, 3 年生では Because SV, SV. の使い慣れた形式とその後に見聞きして得た正しい用法との混合形式が見られるなど、授業等のインプットが学習者のアウトプットである英作文に色濃く現れる様子が観察された。このことから、上記の明示的インプットを体系的に行うことによる効果は大きいと考えられる。

4 点目は、断片文使用の予防策は、英語に特徴的な論理構造理解の促進の可能性にあることである。断片文 SV. Because SV. の原因として挙げられるのは、日本語と英語の論理展開の差異に学習者が明確に気付いていないことである。そのため、「A なので B である。」またはその強調版である「A である。なぜなら B だからである。」という、日本語の持つ原因から理由へと流れる論理構造をそのまま適用して英文を書いている高校生が非常に多く、これが断片文使用率の高さ(小林, 2009)として現れている可能性がある。英語では重要情報に焦点を当てるという論理構造があり、原因よりも結果を重視して、結果を表す主節が前置される特徴がある。これを日本語と比較して日本語の論理展開を解釈すると、時系列に情報を配置する形となることに気づく。この時系列の情報配置から英語に独特な重要性への焦点の情報配置への移行は、英語母語話者にとっても容易なものではないことを証明する研究もある。Bebout, Segalowitz, & White (1980)の研究では、子どもが明示的に起こった原因と結果の 2 つの出来事の説明で、時系列はうまくいくが逆は難しい段

階を経る現象に注目し、実験で検証した。その結果、年少ほど全体のエラーが多く、差が有意に大きいのは時系列とは逆順の Y because X の解釈についてであることを発見した。このように英語の論理展開の習得には困難が伴う可能性が高いことも想定して、インプットを工夫する必要がある。

## 6.2 教育的示唆と本研究の制約・課題

教育的示唆として次の 3 点が重要である。1 点目は、英作文指導で、学習者に辞典情報などを提示して、明示的に過剰使用や断片文が問題だと気づかせることが必要である。2 点目は、過剰使用改善のため、because の語法の指導で、理由表現の場面による様々な使い分けを示すことである。理由の強さや文脈により because 以外の表現を用いたり、文脈のみで因果関係を表したりする例も示すことが望ましい。3 点目は、等位接続詞や従位接続詞など、接続詞を用いた文構造の指導の機会により、断片文の使用改善の可能性はある。それぞれ例示にはコーパスのコンコーダンス検索の援用で、学習者に語や表現に関する文脈を提示でき、理解が深まると考えられる。

「語には完全に同じ意味のものはないので、本当の意味での同義語というのはほぼ存在しない(筆者訳)(Goldberg, 2019, p. 23)」といわれる。これは形式を意味と一致させる必要があることを示唆するが、学習者はその習得過程において、特に初級者の時は形式と意味に同時に注意を払うことができず、意味を優先してしまう(VanPatten, 1990)という。because の使用を通して日本人高校生の英作文における習熟過程を観察したが、高校 1 年生から 2 年生にかけての期間がまさにこの初級者にあたり、because 過剰使用や断片文使用はこの形式と文脈上の意味の不一致が現象化したものだと考えられる。一方で、この時期にインプットが増え、2 年生段階でそれがあふれ出すようにさまざまな because 文型を使いだす様子が英作文コーパスデータで観察された。Goldberg (2019)によると、実験的文脈で「関連重要事項を強調したり、適切な選択肢へアクセスしやすくなる足場掛けが提供されれば、小さな子どもでも早期に適切な一般化ができるよう促すことができる(筆者訳)(p. 104)」と予測している。このように、母語話者の言語使用形式を観察する多くの機会や、ある語と類語の違いを、文脈を示しながら提示する明示的インプットがあれば、because の類語の使用や使用場面の情報も適切に取り込まれることが期待される。これにより、高校 2 年生から 3 年生へかけての正しい用法の定着をより確かなものにできる可能性がある。この時期に、英語が苦手な生徒でも語と語の繋がりを視認できる段階的なリーディング活動、じっくりと考える練習になるライティング活動を重点的に取り入れて英語学習を実りあるものにする必要がある。

断片文の使用の改善については、6.1 で述べたように、日本語と英語で論理展開が異なることに意識を向けるような明示的指導が効果的だと考えられる。この英語の論理展開の根底にある重要な要素として結束性にも注意を払うことが重要である。情報の重要性に焦点を置きながら、前から後ろへと繋がるように情報の流れを紡いでいく姿勢が、英作文では非常に重要になる。前文との繋がりによっては、母語話者使用でも because が文頭に置かれることもある。このことの訓練としての活動を授業に取り入れるとすれば、文中の語の並べ替えやパラグラフ内の文の並べ替えなど、言語ごとの論理形式に従って情報を配置する練習が挙げられる。このように、伝えたい情報を英語の

論理展開に沿って組み立てる練習をする活動を、新設された「論理・表現」の時間などの一部として入れ込み継続すれば、英語の論理形式への慣れが促進されるのではないだろうか。その他に、英語圏の教材の使用など、母語話者の子どもがライティングの授業でどのような活動をしているかの情報を参考にすることも助けとなる可能性がある。母語話者情報を参照しつつ、学習者が表現豊かで分かりやすい英文を書けるよう、表現多様性と論理性的の両面に注意を向けられる活動を授業に取り入れる必要がある。それを実現するために、言葉の多面的な使われ方を様々な場面、様々な文脈で取り込む工夫に、教員は取り組んでいくことが望まれる。

本研究の制約は because の定性的側面からの分析がまだ不十分なこと、英作文のトピック統制が厳密でないこと、コーパス中のサンプル数や同学年の習熟度のばらつきの影響が十分に考慮されていないことが挙げられる。特にトピック統制に関しては、JEFLL Corpus 作成者の投野(2007)も「語彙分析の際にはこのようなトピックの影響を勘案する必要がある(p. 10)」と言及しており、今後の研究ではトピックやプロンプトによる because 使用への影響、さらには because 使用の共起語やコロケーション分析などより細やかな because の振る舞いについて、定性的・定量的分析が実施される必要がある。このことで、母語話者の because 使用での理由表現使用方略の発見や、学習者の使用文脈の観察により、学習者の習熟過程をより多角的に観察できると考えられる。

## 引用文献

- Bebout, L. J., Segalowitz, S. J., & White, G. J. (1980). Children's Comprehension of Causal Construction with "Because" and "So." *Child Development*, 51 (2), 565-568. doi:10.2307/1129293
- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., & Finegan, E. (1999). *Longman grammar of spoken and written English*. Pearson Education Ltd.
- 藤本和子(2010). 「原因・理由を表す because 節の位置について: 学習者への指導をめぐる」『英語英文学研究』(創価大学英文学会) 35(1), 61-78. Retrieved May 22, 2020 from <https://ci.nii.ac.jp/naid/120005607039>
- Garner, B. A. (2016). *Garner's modern English usage* (4th Ed.). Oxford University Press.
- Goldberg, A. E. (2019). *Explain me this: Creativity, competition, and the partial productivity of constructions*. Princeton University Press.
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠編(2010). 『言語研究のための統計入門』くろしお出版.
- 小林雄一郎(2009). 「日本人英語学習者の英作文における because の誤用分析」『関東甲信越英語教育学会誌』 23, 11-21. doi:10.20806/katejo.23.0\_11
- Matthews, J., & Wijeyewardene, I. (2018). Exploring relationships between automated and human evaluations of L2 texts. *Language Learning & Technology*, 22 (3), 143-158. University of Hawaii National Foreign Language Resource Center. doi:10.125/

44661.

文部科学省(2018). 「高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説 外国語編 英語編」.  
Retrieved November 21, 2020 from [https://www.mext.go.jp/contnt/1407073\\_09\\_1\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/contnt/1407073_09_1_2.pdf).

Narita, M., Sato, C., & Sugiura, M. (2004). Connector usage in the English essay writing of Japanese EFL learners. In Lino, M. T., Xavier, M.F., Ferreira, F., Costa, R., & Silva, R. (Eds), *The proceedings of the fourth international conference on language resources and evaluation* (pp.1171-1174), European Language Resources Association. Retrieved July 3, 2020 from <http://www.lrec-conf.org/proceedings/lrec2004/pdf/48.pdf>

Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J. (1985). *A comprehensive grammar of the English language*. Pearson Education Limited.

Swan, M. (1980). *Practical English usage* (2nd Ed.). Oxford University Press.

田畑光義・大井恭子(2012). 「中学生へのパラグラフ・ライティング指導の効果の検証」『関東甲信越英語教育学会誌』 26, 79-91. doi: 10.20806/katejournal.26.0\_79

田中茂範(2015). 『表現英文法[増補改訂版]第 2 版』コスモピア株式会社.

投野由紀夫(2007). 『日本人中高生一万人の英語コーパス JEFLL Corpus : 中高生が書く英文の実態とその分析』小学館.

VanPatten, B. (2018). Attending to form and content in the input: An experiment in consciousness. *Studies in Second Language Acquisition*, 12(3), 287-301, Cambridge University Press 1990. doi:10.1017/S0272263100009177

英和辞典・英文法参考書

江川泰一郎(1991). 『英文法解説改訂三版』金子書房.

井上永幸・赤野一郎(2013). 『ウィズダム英和辞典第 3 版』三省堂.

小西友七・原川博善(2002). 『ベーシックジーニアス英和辞典』大修館書店.

南出康世(2014). 『ジーニアス英和辞典第 5 版』大修館書店.

野村恵造・花本金吾・林龍次郎(2013). 『オーレックス英和辞典第 2 版』旺文社.

塙タカユキ(2017). 『Evergreen』いわずな書店.

大西泰斗・ポール・マクベイ(2011). 『一億人の英文法』株式会社ナガセ.

投野由紀夫(2020). 『エースクラウン英和辞典第 3 版』三省堂.

綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘(2000). 『徹底例解ロイヤル英文法 改訂新版』旺文社.